

in jam' は、「ホッラマ・ディーン」を指すことは明らかであることから、原文にない「ムハンマラの」を訳出するに際して敢えて加える必要があるかが疑問で、むしろ、「バーティーン派およびホッラマ・ディーンの一団」とした方が読者にはわかりやすいのではないか。

296 頁・第 2 段落冒頭——「(……反乱を起こした) ホッラマ・ディーンの者たちは彼に合流しようとしたが」のここでの「彼」がバーバクであるとする、その「彼」に合流したのは「ホッラマ・ディーン」でなく、「バーティン派」であるとは考えられないであろうか？

297 頁 4 節の末——「その数は五〇〇〇、一万、二万と増えていき」は、「一万が二万五千へと増えていき」とするのが自然ではないか。

(藤井守男 東京外国語大学総合国際学研究院教授)

**馬場多聞『宮廷食材・ネットワーク・王権——イエメン・ラスール朝と一三世紀の世界』九州大学出版会
2017 年 x+326 頁**

ラスール朝(1229～1454 年)はイスラーム以後のイエメンの歴史において最も有名な王朝であろう。インドと地中海を結ぶ交易路の要衝に位置したことから、海域に注目した研究でもよく取り上げられており、日本では家島彦一、栗山保之による一連の研究が知られている。

本書は管見の限り日本で最初に出版されたラスール朝に関する単著である(未出版のものでは、ラスール朝年代記に関する家島の博士論文が存在する)。とすれば、読者の中には海上勢力としてのラスール朝の歴史が詳細に記述されていたり、現在流行している「全体史」の中にラスール朝を位置づけられていたりすることを期待する人がいるかもしれない。

本書はそのようなアプローチはとっていない。議論の中で注目するのは宮廷食材の入手、利用、分配であり、それにまつわる地域内のネットワークと王権のかかわりである。

本書の構成は以下の通りである。

序章

第 1 部——食材・料理・宴席

第 1 章 食材

第 2 章 料理・宴席

第 2 部——地域内ネットワーク

第 3 章 宮廷への食材供給元

第 4 章 地理認識

第 3 部——王権

第 5 章 宮廷組織と食材分配

第 6 章 家内奴隷

結論

第 1 部、第 2 部、第 3 部のタイトルは、おおむね本書の書名に対応している。

序章において著者は、13 世紀をイスラーム世界における世界帝国(アッバース朝、オスマン朝)の狭間にある時期だと位置づける(後述の通り、本書の最後にもこの考えは繰り返される)。同時に、当時は「13 世紀世界システム」とも言えるような多地域間のつながりが見られた時代でもあったこと、ラスール朝は「インド洋海域世界」の重要な一角を占めていたことを、アブー・ルゴドや家島彦一の研究を参照しながら述べる。しかし本書はこのようなシステムを構成していた諸要素のひとつとしてラスール朝を扱うことをあえて

拒否している。むしろ、複数の地域・海域からなる総体を見ることによって見落とされがちな、各地域のダイナミズムを史料によって明らかにし、それがより大きなシステムとどのようにつながっていたのかを論ずるのが本書の真の狙いである。

著者が依拠する主な史料は、『壮麗なるムザッファール一世の時代におけるイエメンの統治と法律そして諸慣習に関する知識の光(以下『知識の光』)』と題された、行政文書の集成である。この本はイエメン・フランス研究所のジャージームによって校訂され、2003年と2005年に出版された。既に国内外の複数の研究者によってこの本に基づいた研究成果が発表されているが、比較的最近に出版されたため、まだ十分に活用されているとは言い難い。筆者は中でも記述の分量に比して十分に注目されていない宮廷食材に関連する事柄に議論の的を絞っている。

このように、本書は通史という形をとっているわけではないため、ラスール朝の歴史は序章において簡単に触れられるにとどまっている。

第1章は、ラスール朝宮廷で使用されていた食材の検討を中心に議論が構成されている。具体的には食材の種類、消費量、産地、調達時期(季節)を俯瞰した後、それらに何らかの傾向が見いだせるのかどうかを、近隣の港との航海時期や祭事と照らし合わせて検討している。またアデン経由でもたらされる域外の生産物がどの程度宮廷の食生活に影響を与えていたのかも議論される。その結果、祭事などの特別な機会、特にラマダーン中は消費量が増加していたこと、インド洋交易における恩恵が、単なる経済的なものだけではなく、食材の多様化によって食生活にも届いていたことが示される。しかし同時に、食材の多くは域内からもたらされたこと、アデン港課税目録に載っていた食材でも実際には域内で生産されていたものも複数あることも明らかになり、輸入品の重要性を過大評価する危険性が明示的にはないにせよ指摘される。

第2章は、宮廷に集まった食材がどのように調理され、どのような機会に提供されていたのかを、料理や宴席に関する記述をもとに議論している。また、同時代の他地域における料理書とラスール朝における宮廷料理の記録を比較することで、イエメンにおける料理の特徴を明らかにしようとしている。その結果、イエメン固有の料理もあれば、他地域と共通する料理もあることが確認される。著者はこの結果を、先行研究におけるヴァレの見解も参照しながら、同時代における知識の広範な伝達と、イエメンにおける新たな知識の出現と読み解いている。またそのような料理が供された宴席は、開催に当たっての諸々の規則と相まってラスール朝の権威と示す機能を持っていたことを指摘する。

第3章では、宮廷への食材供給元を議論することで、ラスール朝内のネットワークを明らかにしている。食材の主要な供給源は南部山岳地域、ティハーマ(ザビードとマフジャム)、アデンであり、北部山岳地域は食材を生産していたにもかかわらず宮廷への供給がほとんどないことが示される。これはこの地域がラスール朝の支配領域の周縁であったことを物語るとともに、王朝の人びとがタイツズ、ザビード、アデンの3拠点を統治の中心と認識していたことも示しているのではないかと説を提示している。この議論は次章でも取り上げられる。

第4章は『知識の光』『アフダル文書集』『南アラビア地誌』などの史料をもとに、ラスール朝内の都市間の移動、およびラスール朝の地理認識についての考察である。主要都市間の距離、所要時間などを、各史料のばらばらな情報から「標準的な」数値、日数に直し、さらに共通の単位に換算した後、各区間の行程日数(マルハラ)と経費(ディーナール)に相関性があることを示す(または相関性が見られない場合にはその理由を推測する)。そして、そのデータを『ムアイヤド帳簿』所収のイエメン模式図と比較し、ラスール朝の地理認識を明らかにしようとしている。その結果、ラスール朝によるイエメンの地理的な認識はタイツズ、ザビード、アデンという3拠点が中心であり、そこから離れるにしたがって実際の距離と地図上の距離に乖離が見られることが指摘される。著者はそこに、ラスール朝の支配領域の限界を見出す。つまり、一般的に「国際性」が強調されるラスール朝の人びとの視座は、実は内側に向かっていたのではないかと推測している。

第5章は食材の分配を通してラスール朝の支配体制を明らかにしている。まず食材の分配に関わった「ハーナ」という宮廷組織の一部がどのような役割を担っていたのか、その起源はどこなのか議論される。そこではアイユーブ朝から受け継いだ組織がイエメンで維持・改良されていたこと、そのためラスール朝は初期から安定した統治を行うことが可能だったこと、よく言われているマムルーク朝からの影響は、ハーナ

に関する限りあまり見られないという見解が示される。また食材の分配については宴席や祭事においてのものと、通常の手当の形をとるものの二つに分類した上で、王朝の内部、特に男性成員や軍人だけではなく、体制外の人びと、特に近隣地域の支配者層や、ラスール朝の女性成員や配下の者へも食材が分配されていたことを明らかにしている。これによってラスール朝は、内部の結束と、ラスール朝の領土以外の場所も含めた南西アラビアの秩序維持の両方を目指していたという見解が示される。

第6章は、食材の使われ方や分配と密接に関連している家内奴隷について議論している。ここでは一般に奴隷と見なされている、アブド、ハーディム、ジャーリヤ、グラーム、タワーシーと呼ばれる人びとについて、その出自、取引価格、従事していた職種、給与水準等を概観している。その結果、奴隷と考えられる人びとの多くは東アフリカからもたらされたこと、マムルークやジャーリヤは北方から運ばれてきたこと、ハーディムと呼ばれていた宦官の地位や給与が他の奴隷に比べ高かったことが明らかになる。またアッパース朝やサファヴィー朝では軍事奴隷を指す言葉として使われていたグラームは、ラスール朝ではもっぱら自由人を指し、さまざまな職についていたことが指摘されている。

結論では1～6章の議論を振り返りながら、ラスール朝を「世界大のネットワークと地域内ネットワーク、王権が重なるところ」、また時代的には「アッパース朝とオスマン朝という世界帝国の狭間」に位置づけて議論を締めくくっている。

本文の後に付されている史料改題(193～231頁)は、どの章よりも長く、使用されているフォントも小さい。ここではラスール朝を中心に、その前後の時代にイエメンに興隆した王朝に関する主要な史料について、それぞれの著者の略歴、カバーする年代、内容の概略、校訂本の出版状況、基になった写本、校訂の質等が簡潔に記されている。これからイエメン史や南アラビア史を志す者にとっては貴重な情報源・研究の指南であると同時に、本書の著者のこだわりを垣間見ることができる。

さて、宮廷食材を中心とした本書の議論から分かることは何だろうか。それは海上の交易の要衝に位置し、海域支配のための船団を保有し、関税が主要な収入源のひとつであったラスール朝の内向きな側面である。第3章で、ラスール朝の歴史と「世界史」がつながるアデンという華やかな場所が、単なる宮廷食材の集散地のひとつとして扱われているのは新鮮である(もちろん、宮廷で供されていた料理には域外から輸入された香辛料が不可欠であったのも事実ではあるが)。これは宮廷食材に注目したからこそ出てくる視点であろうし、食材に注目した理由も単に奇をてらったわけではなく、史料に向き合った結果だという点も評価したい。

実際のところ、本書全体を通して見えてくるのは、史料に誠実に向き合う著者の姿である。史料から引用するに際しても、著者自身の理解に基づいて意味を伝えるよりも、史料における記述をなるべくそのまま再現しようとしている。本文中には19の表が付されているが、中には10頁を超える長さのものもある(89～101頁)。本書の執筆中、著者が最も楽しんでいたのは史料を再現・分析する作業だったろうと想像できるし、本文を読んでいると著者の歴史研究者としての姿勢が十分伝わってくる。

しかし、史料に書かれている部分からあまり出ずに、安全圏で無難な議論をしているという印象も受ける。各章の最後に付されている「おわりに」は、それぞれの章における議論が簡潔にまとめられており、よく分からない単位、数量、地名、食材名によって迷子になりつつあった読者を元の道に戻してくれる。しかし、議論によってどのような新たな知見が得られるのかについてははっきりしていないことが多く、先行研究の問題点や更なる研究の必要性を指摘する段階で止まっている(188頁ほか)。結果として、家島、アブー・ルゴド、スミス、栗山が提示した論と巧みに共存する形で議論が進んでいく。もっとも食材ほかの用語の意味など、細かな点では先行研究で示された見解に修正を迫っている(62、174、179～182頁)のは確かではあるが。歴史研究者としての筆者の姿勢は評価するが、多少「冒険」をしても、もう少し新規性を出してもよかったのではないと思われる。

また、ヴァレの学問的な姿勢や論考から大きな影響を受けていることも気になることである。序論においても、同時代他地域との比較に重点を置いたブローデルやチョードリーなどのアプローチを放棄し、あくまでラスール朝の資料群に立脚するというヴァレの立場が紹介されているが(10頁)、これはそのまま筆者の立場にもつながる。議論の中でもヴァレの研究は参照点としてたびたび触れられている(49、85、136、192頁ほか)。著者がヴァレの立場を無批判に受け入れているわけではないことも分かる記述にはなってい

るが、もっと自分の独自性を明示すべきであろう。

細かい点を色々と指摘したが、評者自身はこの研究が将来的に発展する可能性を秘めていると考えている。ひとつの方向性はイスラーム世界内外の宮廷料理・食材との比較である。テーマの選定によってはラスール朝の特徴をより明確に浮かび上がらせることができるだろう。また、本書では食材の調達や輸送に関する議論を行うために年代記を利用しているが、その逆を行うことの可能性も追求すべきだろう。つまり、年代記に記されている種々の事件・出来事が、宮廷食材に関する情報を参照することで、より立体的に浮かび上がってくることになれば、ラスール朝に関する新たな歴史を書くことも可能だろう。いずれにしても史料の制約から難しいとは思われるが、本書で提示された知見をもとに、更なる発展を期待したい。

瑣末ではあるが、評者の専門に関わる部分で細かい点を指摘したい。史料解題において著者は『書記官提要』の著者 al-Hasan b. 'Alī al-Husaynī を、フサイン裔であることを理由としてザイド派と見做しているようである (221 頁)。これはスミスによって出版された同書の抄訳と影印に付された解説に倣ったものと思われる。しかしラスール朝に組み込まれていたハドラマウトにもフサイン裔が多数居住しており、スンナ派・シャフィイー派であった。ザイド派の人間がラスール朝に仕えていた例があるためザイド派でないとも見做せないが、サイイド・シャリーフという血統に基づいた分類と宗派性は切り離して考えるべきだと評者は考えている。

本書は、家島、栗山に続き、新たなラスール朝研究者が現れたことを示している。最初のお二人は研究成果を日本語で発表することに拘っているように見受けられるが、若手研究者としては是非日本におけるラスール朝研究の存在を英語ほかの言語でも発信していただきたい。いずれにせよ、多地域間交流の華やかさに注目が集まりがちな傾向が見られる中で、「足元を見る」ことの重要性を再確認させてくれる研究であり、今後の発展のさせ方次第では新たな地平が開ける可能性を持っている研究だということを指摘してこの書評を終えたい。

(新井 和広 慶應義塾大学商学部教授)

吉田悦章『グローバル・イスラーム金融論』ナカニシヤ出版 2017年 iv+214頁

イスラーム金融が日本経済新聞の1面を初めて飾ったのは、2006年のことであった(同年6月18日朝刊1面『『イスラーム金融』受け皿整備』)。当時は、原油価格の高騰によって生み出された膨大なオイルマネーが、イスラーム金融の成長を後押しし、中東湾岸諸国や東南アジアで空前のイスラーム金融ブームが沸き起こっていた。日本の政府や金融機関も、オイルマネーの取り込みをめざすべく、イスラーム金融への本格的な参入を検討し始めた。それに伴い、金融実務家や経済評論家による一般書も数多く出版され、日本におけるイスラーム金融の認知度と注目度は一気に高まっていったのである。

それから10年以上の歳月が経った。その間、日本国内でイスラーム金融向けの法整備が進んだり、大手金融機関が東南アジアや中東のイスラーム金融市場に進出したりするなど、日本発のイスラーム金融の実践は着実に歩を進めている。しかしながら、国内でのイスラーム金融熱は10年前と比べてすっかり冷めてしまった。イスラーム金融の一般書は、一部の例外を除いて2010年を最後にぱったりと出版されなくなり、新しもの好きの金融実務家や経済評論家の関心は、ブロックチェーンに代表されるフィンテックに移ってしまっている。また、イスラーム世界への経済的関心の多くは「ハラール」に移行しており、10年前にイスラーム金融の「専門家」として、広くマスコミに登場していた顔が、今度はハラールの「専門家」としてしたり顔で解説をしている滑稽な姿を見ることができる。

イスラーム金融を主たる研究対象としている評者は、なにもイスラーム金融熱が冷めてしまった現状を憂えているのではない。ブームが沈静化したことは、イスラーム金融の実践が「日常化」した証左であり、必ずしも実践の衰退を意味しているわけではないからである。また、実践が日常化してはじめて、イスラーム金融の意義や可能性をブームに左右されない確固たる視座から研究できるという意味においては、イスラーム金融研究に腰を据えて取り組める時機がようやく到来したとすることができるだろう。